

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節祈禱会

イザヤ書の預言とキリスト

――イザヤ書第11章1～10節――

1994年12月25日

小池辰雄

在りて在らしめるもの アンダー・ゴッド 何を相手にして生きているか 平安の国 魂をこめて歌おう 祈り

【イザヤ11】

1 エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。² その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。³ かれはエホバを畏るるをもて^{たのしみ} 歓楽とし、また目みるところによりて^{さだめ} 審判をなさず、耳きくところによりて^{さだめ} 断定をなさず、耳きくところによりて^{さだめ} 断定をなさず。⁴ 正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて国のうちの卑しき者ために^{さだめ} 断定をなし、その口の杖をもて国をうち、その口唇の^{くちびる} 氣息をもて^き 悪人をころすべし。⁵ 正義はその腰の帯となり、忠信はその身のおびとならん。

6 おおかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし、^{けだもの} 犢^{こやうし} おじし肥たる家畜^{けだもの} ともに居て^{おり} ちいさき童子^{わらべ} にみちびかれ、^{とも} 7 牝牛と熊とはくいものを^{ちのみ} 共にし、熊の子と牛の子とともにふし、^{ちのめ} 獅はうしのごとく^{わら} 藁をくらい、^{ちのめ} 8 乳児は毒蛇のほらにたわむれ、乳ばなれの児は手をまむしの穴にいれん。^{ちのめ} 9 斯てわが^{きよ} 聖山のいずこにても^{せい} 害うことなく、^{やい} 傷ることなからん。そは水の海をおおえるごとく、エホバをしるの知識地にみつるべければなり。

10 その日エッサイの根たちでもろもろの民の旗となり、もろもろの邦人^{くにびと} はこれに^{まつ} 服いきたり、^ま 栄光はそのとどまる所にあらん。

●在りて在らしめるもの

1 エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。

これは不思議な言葉ですね。「エッサイ」はダビデのお父さんですが、旧約のダビデがキリストの予表として預言されているわけです。非常に文学的な表現で書いてありますが、ここに「エホバ」というのはヘブライ語では



「ヤーヴェー」

といって、

「在りて在るもの」

実際に存在するものという意味です。いろいろのものは、生じてはまた消えていく。ところが、神さまは常住で消えない。それが「在りて在るもの」です。あるいは、在ることが諸々のものを在らしめているから、

「在りて在らしめるもの」

と訳してもいい。太陽は正にそういう意味で自然界の「エホバ」みたいなものだ。太陽が在るということは、太陽系のいろいろな星をみな在らしめている。地球を在らしめている。地球の上の生物も人間もみな太陽の光熱でもって生命をいただいて、在るわけです。だから、太陽神といって、太陽を神さまみたいに拝む人もあるわけです。

我々が光というものを知るのは太陽のお陰なんだ。太陽がなかったら、我々は光なんていうものは分からない。それと同じように、人間界の光はキリストなんです。キリストが現れなければ、神さまは分からない。キリストは神の光の現象体だから。存在そのものが光なんです。その光は熱をもっているから人を温める、生命を与える。クリスマスは、そういう意味で、光の根源であり生命の根源であるキリストの降誕です。

お釈迦さんにはそれだけの力がない。創造的な力がない。仏教の方は悟りの世界だから。お釈迦さんの慈悲は慈悲で、それはありますけれども、まだ次元がちよつとちがう。イエスというひとは大変なひとです。キリストは世界の歴史を両断しているような存在です。

「キリスト教」

ではない。なにも「教え」ではない。キリストそのものです。キリストという実体、存在そのものです。「我は教えなり」なんてキリストは言ってやしない。

「我は道なり生命なり」

と言っている。

日本人はこの「道」の字が好きなわけだ。華道、茶道、柔道、剣道、みなこれは道なんだ。道というのは、真理を体現するのが道だ。実際に歩いてみなければ、眺めていたのでは、道が分からない。そして、道なき道を歩く。道を創造していく。無道の道ということ。道無き道を進んでいるものは何ですか。鳥です。鳥はひとつも道がない。大空を自由自在に飛んでいる。飛んでいる跡が即ち鳥の道なんだ。旧約聖書の「箴言」に面白い言葉がある。

「わが奇とするもの三つあり、否な四つあり。共にわが識ざる者なり。即ち空にとぶ鷺の路、磐の上にはう蛇の路、海にはしる舟の路、男の女にあうの路これなり。」(箴言30・18～19)

と面白いことが書いてある。「無道の道」の世界は老子だね。老子の言葉の中にある。



イザヤ書11章にもどります。

²その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聰明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。

「謀略」という訳がちよつと言葉がおかしい。本当のはからいです。「知識」という訳も、いわゆる観念的な知識ではない。本当の智慧のことです。「おそるる」は恐^{こわ}がるではない。畏^{おそ}れる、平伏^{ひれふ}して拝することです。畏敬する、あるいは恐れ親しむこと。我々人間の本当の態度は平伏しなんです。神の前に平伏さないものは本当の人間ではない。

●アンダー・ゴッド

今のいわゆる民主主義はダメだ。リンカーンが、

「アメリカのデモクラシーはアンダー・ゴッドである」

と言っている。「神の下において」ということです。日本の民主主義にはこの

「アンダー・ゴッド」「神の下に」

という意識がないから、「民主主義」なんて言っただって、身勝手主義になつてしまう。人間中心でダメなんです、神中心でなければ。

始めは、太陽が動いていて地球が止まっていると思った。冗談じゃないよ、太陽の回りを地球が回っているんだ、地動説なんだ。昔は天動説だ。天が、太陽がグルグル回っていると思った。そうではない。地球の方が回っている。太陽がなければ地球は在りはしない。太陽がそっぽを向いたら、地球はどこかへ行つてしまつて、終いには破裂してしまふ。太陽は引力を、引っ張り回す力をもっている。

自然界というのは素晴らしいものだ、大自然の法則というものは狂いがなくてやっているのだから。素晴らしい法則が働いているのを自然という。

「自^{おの}ずから然り」

ということ。大自然は、自ずから然りの姿である。人工的なものはダメなんだ。人工の造り花はダメなんだ、どんなに立派でも、それは生命がない。ところが、本当の花はどんなに虫が食つていても生命がある。本当の生命をもたないものは、どんなに立派そうにみえてもダメなんだ。花は散つても、散るのがまたむしろ面白いくらいです。

小学校から大学まで、先生方が本当の

「アンダー・ゴッド」(神の下に)

の意識で教育している人が何人いるか。ほとんどいないのではないですか。神さまぬきで本当の教育なんてものはできないんだ。神さまでも仏でも何でもいい。とにかく、

「絶対者の、絶対的な次元の存在の下において」

ということですよ。お釈迦さんくらいではやはりダメだ。

だから、ヨーロッパの歴史はキリストの道がずうっと伝わっているから、やはりちよつ



と違う。電車の中で少し年取っている人が前に立てば、ドイツだったら若い人は必ず立ちます。それはやはり本当の宗教が彼らは身につけているから。ところが、日本では立たないで平気な顔をしている。日本は無宗教だ、情けないね。日本の将来はどういうことになるか。仏道でもキリスト道でもいいですよ、本当のそういった世界をもたなくてはいかん。全く小学校の先生自身がそれから始めなくてはな。私の小学校の時の校長さんは佐々木吉三郎という人だったが、この人は宗教的な人だった。私は感激して聞いていた。佐々木先生は、

「男でも女でも誰でも哲学精神をもたなくてはいかん」

と偉いことを言っている。

「本当の自分の道をもて」

ということです。昔は「講堂修身」といつて月曜日の朝、校長さんがお話する。それを私は感激して聞いていた。それが一番楽しかった。いわゆるお説教ではない。本当に自分の体験からものを言っている。何か研究してものを言うような人はダメなんだ、体験からものが言えなければ。

だから、いわゆる「聖書研究会」なんていうもので聖書が読めるかというんだ。冗談じゃない。

「^{からだ}身体で読め。聖書の中に自分を投げ入れて読め、聖書はただ文字ではないんだ、現実なんだ」

と。そういう気合が、この頃はどうもないようだね。

3 かれはエホバを畏るるをもて^{おそ}歡樂とし、^{たのしみ}

これです。楽しみをもつて畏れなくてはいかん。これはうれしいんだ。詩篇にも、

「^{おそれ}畏をもてエホバにつかえ^{おののき}戰慄をもてよろこべ。子にくちつけよ」

とある。「子」というのは神さまの子のことです。キリストの預言です。

おそらくはかれ怒りをはなち、なんじら^{みち}途にほろびん。その忿^{いきどお}怒はすみやかに燃ゆべければなり。すべてかれに依頼^{よりたの}むものは福^{さいわ}いなり。」(詩篇2・11)

12)

「依り頼む」というと、何か自分が意気地のないように思うが、そうではない。依り頼むというのは、相手は絶対的な力をもっているから、これに依り頼むと、こつちに力がやってくる、力が入ってくる。いわゆる「キリスト教」をやっている、力のないようなクリスチャンはクリスチャンではない。本当はひとつも受けとつてないんだ、理屈で受けとつている。理屈ではダメだ。

私はただ気力だけではなく、体力もある。90歳で私くらいな気力、体力のあるやつはあまりいないかも知れない。大体、同期生は皆いなくなってしまった。今、二、三人は知っているけれども、あとは分からない。



「健全なる肉体は健全なる精神を養う」

ようなこと言っている人があるが、冗談じゃない、逆なんだ。力ある魂は身体をも力ある身体にするんだ。

断食は、水を飲んで、では何を食べるか。キリストを食べる。キリストは

「我をくらえ」

と言った。キリストを食べるから、水だけを飲んでいればいい。なぜ、断食するかというと、やせ我慢して断食するのではない。食べものはキリストなんだ。キリストの中に祈り入ると、キリストの生命がくる。

●何を相手にして生きているか

私が聖霊を受けたのは、阿蘇で手島さんと一緒に集会をした時です。私は平伏して祈っていたら、身体がしびれた。身体がしびれたから、これが聖霊のバプテスマだと思った。身体がしびれて平伏してしまった。そして今度は、自然を見たら、何か自然が光っているんだ。

「いや、これは素晴らしいことだなあ」

と。あれが聖霊のバプテスマだ。

それで、いわゆる無教会の観念信仰からサヨナラした。手島さんと二人でやった。手島君と私は無二の親友だった。人間的にはお互いにいろいろ欠点があるさ、そんなことはどうだっていい。人間をみるときに、その人が何を相手にして生きているかを見なくてはいいかん。大事なことは、何を相手にして生きているかということだ。

いわゆる民主主義なんていうものではダメなんだ、「アンダー・ゴッド」でないと。ある

いは

「イン・ゴッド」(神の中に)

ということ。アッシジのフランチェスコなんていうのはそういう「イン・ゴッド」の人です。本当に素晴らしい。フランチェスコはルターの前宗教改革者だ。ローマ法王なんて何とも思っでやしない。彼は死ぬ時には大地に平伏して往生した。

3 かれはエホバを畏るるをもて^{たのしみ}歓楽とし、

また^{さばき}目みるところによりて^{さだめ}審判を

なさず、^{さだめ}耳きくところによりて^{さだめ}断定をなさず、

耳きくところによりて^{さだめ}断定を

中身を本当に見ている。

4 正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて国のうちの卑しき者ために^{さだめ}断定をなし、その口の杖をもて国をうち、その口唇の^{くちびる}氣息をもて悪人をころすべし。

5 正義はその腰の帯となり、忠信はその身のおびとならん。

「貧しき者をさばき」というのは「貧しき者の為にさばき」ということです。貧しい人たちのために裁く。



「恵福^{さいわい}なるかな、貧しきもの」

という。貧しいのは、金銭的に貧しく、それから、魂が貧しいのが大事なんです。

「恵福なるかな、霊の貧しきもの」

ということ。魂が貧しいというのは、自分を何ものともしないということです。自分は

「無者」

である。自分は何者でもない。自分をサムシングにする者はダメなんです。無者は無限無量になる。電灯の光ではダメなんだ、何も電灯は要らない。太陽の光を、神さまの光を受けなくては。

この頃、曙^{あけみようじょう}の明星がきれいだね。朝早く起きると、曙の明星が出ている。あれは太陽のさきぶれだ。しばらくたつと、お天道さんが上がってくる。

日本は

「日の本^{ひのもと}の国」^{とよあしはらみずほ}「豊葦原の瑞穂の国」

という。「瑞穂」とはお米のこと。日本人はもつと自覚しなければダメだね、民主主義なんて言ってるんでは。「主義」というのはダメなんです。主義というのは限定された世界です。主義を超えて超主義にならないとダメです。ゲーテが

「ものごとを限定したらダメだ、死んでしまうぞ」

と言っている。無限定の世界です。この無限定があると、いろいろな諸々の主義がちゃんとかめる。それぞれを役に立てる。超主義そのものが無くてはダメです。

●平安の国

「エホバを畏るるをもて歡樂^{たのしみ}となし」

とはいいい言葉だ。何といつても、ユダヤ人というのはとにかく昔からやはり選びの民だね。あのチャップリンがユダヤ人ですよ。チャップリンがなぜ素晴らしいかというと、あれはもともとユダヤ人なんです。チャップリンみたいなあんな芸能者はもう再び出ない。偉大な人物だ。笑わせたり泣かせたりするが、凄い真理を彼は身につけている。彼は生まれは貧乏で、ロンドンの公園のベンチで寝たりした。そして、イギリスからアメリカに來た。

6 おおかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし、犢^{こうし}おじし肥

たる家畜^{けだもの}ともに居^{おり}てちいさき童子^{わらべ}にみちびかれ、7 牝牛^{めうし}と熊とはくいものを

同^{とも}にし、熊の子と牛の子とともにふし、獅^しはうしのごとく藁^{わら}をくらい、

これはなんという現実を語っているかね。こんなことを書けるということは、そこは本当の平安の国なんだ。平和ではない。平安です。それぞれの存在が神さまと連らなっている世界を平安という。平安があるところに本当の平和がくるので、平安のない平和はダメなんです。そんなのは崩れてしまう。よく、政治の世界で平和会議なんてやったって、あんなものは怪しげなものだ。



19世紀の偉大な政治家――リンカーン、グラッドストーン、ビスマルク――はみな本当に神さまを畏れた人たちです。聖書が身についている人たちです。そんな政治家が日本にいるかい。根底に深い宗教をもたないものはみなダメなんだ、高が知れている。

西郷南洲は

「敬天愛人」

と言ったでしょ。さすがは南洲だ。天を敬い人を愛する。「敬天」がなければ本当の「人を愛する」ことはできない。あの頃の人物で私が本当に尊敬するのは西郷南洲だ。人にどう扱われようと、南洲なんかは何も抗弁しない。大人物というのは言葉でもって争うようなことはしない。

私はキリストさまをいただいたから、他は何も要らない。キリストというのは大変なひとだからね。十字架に架かってイエスは何と言ったですか。

「彼らは為すところを知らず、赦してやってください」

と。

「自分を十字架に架けた連中を赦してやってください」

と神さまに祈っているんだ。これが本当の愛です。最大の力はこの愛なんです。

どういような取り扱いを受けても、神さまに感謝するような魂になればダメなんです。

「どうもけしからん」

なんて言っているうちはダメなんだ。

「ああ、結構でございます」

と。それが相対的な判断を超越した世界なんです。我々はそういう魂をいただいているわけです。

「魂之霊」は「たましひ」と読む。霊は「ひ」と読む。「たましい」と書いては意味をなさない。魂之霊の「霊」は神の霊です…（異言）…。

聖書を読んでいると、私は力が来てしょうがない。だから、自分で異言が出てくる。異言というのは人には分からん。

乳児は毒蛇のほらにたわむれ、乳^ちばなれの児は手をまむしの穴にいれん。

どうしてこんな事を書くかと、みな言うでしょ。凄いねこれは。こういう世界をイザヤという預言者は既に先見しているわけです、

「本当の天国はこういう所だぞ」

と。これは想像して書いているのではない。これには参りますよ、降参して読まなければダメなんです。

「参りました！ 大変な文字だ」

と言って降参して読むと、こういう現実に入る。いわゆる思想ではない。哲学者や文学者



が言う「思想」なんていう世界はダメなんだ。思想ではない。これは「啓示」の言葉だ。上から啓示されている。瓢々たる世界です。瓢々として捕まえようがない。

漢字というのは素晴らしい。世界最高の文字は漢字です。漢民族は素晴らしい。漢字をいい加減にしたらダメです。略したらダメだ。漢字から日本語のひらがなもカタカナもできた。小学校からもうと漢字を教えるといい。漢字は目でパッとくるから非常にいい。

●魂をこめて歌おう

イザヤ書11章1節から10節までは、こういう天国を預言しているわけです。

9 斯てわが聖山のいずこにても害うことなく、傷ることなからん。そは水の海をおおえるごとく、エホバをしるの知識地にみつるべければなり。

10 その日エッサイの根たちでもろもろの民の旗となり、もろもろの邦人はこれに服いきたり、栄光はそのとどまる所にあらん。

とある。聖書というのは大変なものだな。絶対に思想ではない。霊的現実でものを書かしまえられている。「聖書」なんていわないで、「霊書」といった方がいい。霊的な書物です。私はこういうものを見てみると、ものを言うのが嫌になっちゃいます。一番いいのは、お互いに聖書を読んで祈って、あとは讃美歌を歌ってお終い、という集会が一番いい。何も言わないんだ。

讃美歌を歌うというのは大事なことです。讃美歌を歌うときには、本当にその世界に自分を代入して歌っていなければダメです。

「あの人の讃美歌がうまいのまづいの」

ということではない。魂をこめて歌っているかどうかということなんです。

普通の讃美歌はものたりないから、私は自分で讃美歌を大体百くらい作った。(召団讃歌

A1番「わが道伴れ」、A33番「主なるキリストは」(独唱)

A1「わが道伴れわが情け」(讃美歌527「わが喜びわが望み」の曲で)

1 わが道伴れ わが情け

わが旅路の主よ

なやみにも 苦しみにも

わが力の主よ!

2 わが道伴れ わが情け

わが天路の主よ

山を越え 谷を渡り

偕に進みたもう!

3 わが道伴れ わが情け

世の救いの主よ



これは私の告白です。こういうのが自然に出てくる。

A 33 「主なるキリストは」(イザヤ49～55) (讚美歌 359 「夕日はかくれて」の曲で)

1 主なるキリストは 選びの民の

救主なれど 彼らは受けず

さはあれキリスト 世の終りまで

彼らの帰るを 祈り待ち給う

2 「ああイスラエル 選びの民よ!

母親情れなく その乳兒を

忘るあるとも 我は忘れじ

永遠の愛に 抱かれざるや」

3 主は侮られて 人に棄てられ

苦患を知り給う 悲哀の人!

しかるに我らは 神に打たれて

苦しめられたる 人と思へり

4 苦しみを忍び 口を開かず

屠場に向う 羔の如

我らの罪をば 荷ないて独り

十字架の上にて 碎かれ給う

……

8 「わが愛の幕屋 大胆なれよ

エホバの僕よ 時期は迫れり

身証の伝道 地道になして

幕屋を拡めて 綱を延ばせよ」

……

11 「渴ける人々 来たりて飲めよ

永遠の水を われは与へん

我は聖霊の バプテスマせん

飲ひ尽きせぬ 生命に溢れん



12 わがエクレシヤよ使徒らの如く

我れに立ち帰り 一如となりて

いづこも聖国の 現実となして

いづれの人をも 迎え抱けよ！」

これはみな私の讃美歌ですよ、こういうのが自然に与えられるんだ。

● 祈り

それでは、あとは簡単に祈りましょう。

主さま、この兄弟姉妹たちの胸の中にあるところの祈り、これを今お聞きください。そして、あなたが

「祈りたることは既に聞かれたりとせよ」

と仰った、その現実をいただいて、ありがとうございます。兄弟姉妹たちの胸にあるところの言葉の奥の祈りを、あなたが知ってくだつて、ありがとうございます。どうぞ、先に帰った人たちも、その道において祈り心で行きますようにお願いいたします。

今日は、朝から今にいたるまで、キリストさまのご降誕を聖書の聖言、現実に分たちを投げ入れて、このように与かりまして、ありがとうございます。霊的な現実を主さまから現実戴くことが、主さまを讃えることであることを今本当に感じて、ありがとうございます。兄弟姉妹たちと共にこのようにして暮らし得たことを御名にあつて感謝いたします。

今年一年間のあなたのご恩を、恵みを本当に、言葉になりませんが、平伏して感謝いたします。私たちはまた来年に向かつて大いなる希望をもって進んで参ります。希望はあなたからやってきます。私たちの願いではありません。どうぞ、一人ひとりを、あなたからくるところの希望の光を受けとつて、その希望を実現をしていくところの器となしてくださいるように願ひ奉る。

私たちは福音の証者として生きて行きます。この福音の証者として、どうぞ、私たちを鍛えてください。

また来年の一月に会うときは、その希望に溢れてやってきますが、兄弟姉妹たちをそれぞれの所においてあなたがとらえ、そして、その周辺の人たちに、言わず語らずのうちに、あなたの光を与え、あなたの愛を与え、証し人としていよいよ進ましめてくださることを信じて、御名を讃え奉ります。

尽くしませんが、心からの感謝と希望と讃美、兄弟姉妹たちのそれとともに、主イエス・キリストの御名にあつて捧げ奉る。アーメン！

